

クオリティ オブ ライフ



老健施設長
外科医師

衛藤 大典

山香病院だより vol.48

するような延命医療が、さかんに行われていました。近年では、自然な経過に任せて最期を迎える『看取り』という形を希望される方、家族も増えていきます。

▼このように死をタブー視することなく、冷静に、客観的にライフサイクルの一環として捕らえて一緒に考えることで、本人や家族の覚悟が決まり穏やかな最期を迎えることができます。

▼寿命が延びたことで、日頃の死への関心が薄くなり、そのことを話すことさえいけないことのように避けられることもありますが、癌を宣告された患者さんの中には死を見つめることで、逆に命が輝くことが多々あります。

また社会的、精神的に不安定になり自ら命を絶とうとする人もいますが、いつかは必ず誰にでも死がやってきますし、一人の人間として生きていく限り、何かの役には立っています。

▼与えられた命を大切に、今を元気に生きるためには身体の健康が第一です。なにか生きがいを見つけていい人生を送られるようにしましょう。

皆さん、こんにちは。
皆さんは、「クオリティ・オブ・ライフ(Quality of Life)」という言葉聞いたことがあるでしょうか？日本語に訳すと、生命の質、または生活の質という意味になります。我が国では1970年より提唱されている概念です。

▼簡単に言うと、ただ単純に生命を維持し漫然と生きるよりも、生きがいを持って、充実した生活をすごせるように努めましょうということです。

私たち医療の現場では、それぞれの患者さんの生命や生活に、密接に関わることが多く、病気を治すことと同じくらいに重要視されています。

▼日本は、世界でも有数の長寿国ですが、これは医学の進歩とともに清潔な環境が整っ

たことや、栄養が行き届いたことにより、子ども、特に乳幼児の死亡率が、著しく低くなってきたことが大きな理由の一つだと思われれます。

しかし、長生きが当たり前になるにつれて、平均寿命が短かったころには思いもよらなかった病気や、身体の変化が現れはじめ、クオリティ・オブ・ライフを損なうケースが増えてきています。

▼例えば癌や認知症、骨粗しょう症などです。このような病気は患者さん本人もつらいですが、家族にも重く負担がのしかかってきます。

▼高齢で、お薬や手術での治療効果が望めない患者さんの場合、ひと昔前までは、人工呼吸や高カロリーの点滴などを使って、生命を人工的に維持